

## 算数科校内研修会を行いました

令和8年6月8日（月）3年2組 指導者 押野 紘平  
算数科「たし算とひき算の筆算」

### 自評

本時の見方・考え方を、数を位ごとに見て、数を合成・分解して、くり上がりやくり下がりの仕組みを考えることと捉えて授業を行った。具体的には、百の位から十の位に1くり下げるとは、100を10が10こに変換して、位としての数の見方ができる力と考えた。児童がこの見方や考え方を働かせることができるように、数カードと位取り表による支援・補助や机間指導時の声掛け等を行った。

○2けた+2けたの筆算のレディネステストを行った際には、計算のしかたを理解して解く児童が多かった。2けた+2けたの流れを生かして授業を組んだ。

○校内研の視点にもあるように、児童に委ねる時間を多く確保し、自分たちの力で課題を解決していくことができた。

○ふだんは個別の指導を要する児童が、単なる計算の仕組みとしての筆算ではなく、思考の支援を得ながらも、数カードで位を変換できたことに、前時までの学びが生かされていると感じた。

▲今回は数カードを使用し、一斉と個別を行ってきたが、筆算の授業をどのようにしていくのが最適か悩んだ。

### 指導助言

加固 希支男先生(教育課程調査官) より

○数カードを使って操作し、視覚的に分かりやすいようにしていたのがよかった。それを児童にさせることもよかった。

▲1時間ごとに課題を切り離すと、一つずつ覚えていけなくてはならなくて、暗記になってしまう。1時間単位の授業ではなく、単元で授業を作っていくことが大事。本時と前時の違いや、今まで習ったことが本時では使えるかといった確認をすることで、授業と授業がつながっていく。

▲練習問題のプリントで定着を図るのではなく、問題作りを行わせてはどうか。問題を解く意義を理解しないままに、作業化してしまうことになりかねない。慣れるまで時間はかかるかもしれないが、既習を生かして問題を作ることで、定着を十分に見取ることができる。

